

大都市イメージの構造

I. 目 的

II. 方 法

1. 調査項目について
2. 調査対象者と調査地点について
3. 調査手続きについて

山 本 真理子*

III. 結果と考察

1. 大都市居住希望を決定する要因の検討
2. 大都市イメージの構造

要 約

第1次の調査結果(対象地点:函館,水戸,名瀬,喜界の各市)を用いて,大都市への居住を希望する要因の検討を行なった。大都市居住希望を従属変数とし,大都市及び自分の住んでいる所についてのイメージを独立変数として数量化Ⅱ類によって分析を行なった。その結果,全体では,「楽しい」、「好きだ」といった大都市への漠然とした評価的イメージが居住希望に大きな説明力を持った。しかし,発達段階によって説明力を持つ独立変数の内容が異なった。特に,大都市への居住希望の強い高校生と居住希望の強くない大人とでは,その内容に大きな違いが見られた。高校生では,大都市への居住希望に関係があるのは,自分の住んでいる所への否定的なイメージが多いが,大人では逆に大都市のプラスのイメージが関係している。大人が,大都市の特性にひかれて居住を希望しているのに対して,高校生は自分の住んでいる土地への反発から大都市への居住を希望している。また,大都市イメージの構造を数量化Ⅲ類を用いて検討したところ,「生活のしやすさ」、「全体的マイナス・イメージ」、「不便さ」、「解放感」などの基本的な軸が認められた。これらの軸のうち,全体的マイナス・イメージの軸が地域差を示し,大都市に近い地域はマイナス・イメージが強く,遠くなると弱くなる傾向が認められた。他の軸は,発達差が見られた。大人は,大都市には生活のしにくさと解放感を感じている。高校生は「楽しい」、「好きだ」といった項目に結び付いた生活のしやすさを感じている。小学生や中学生は他の者に比べると大都市へのイメージはあまり明確でないのか,中間的な位置を示している。

I. 目 的

環境心理学的な興味から大都市や自己の居住する場所の認識に関する研究が,最近では少なから

ず行なわれるようになってきた。都市の居住者が居住都市に対していただくイメージの分析(Lynch, 1960)や,大都市が個人の行動に与える影響の検討(Milgram, 1970)などが行なわれている。また,

* 東京都立大学都市研究センター・人文学部

土地のイメージを、居住住居形態の違い（岡崎・駒崎，1978，1979）や土地の物理的位置（菅野・田中ら，1981a，1981b），そして，居住地（都市周辺か地方か）の差などから検討しようとする試みがなされている。

我々も，前稿の「都市イメージの分析」及び「都市イメージに関連する要因の分析」で触れている通り，これまで大都市居住者と地方居住者の大都市へのイメージの分析を，さまざまな地方都市を対象地として行なってきた。この一連の研究の全体的な目的と理論的な枠組は「都市イメージの分析」で示した通りである。これらの研究の中で都市イメージの分析Ⅰ，Ⅲなどの研究では，地方在住者がいかに都市イメージや居住地イメージの分析を，居住地（都市周辺か地方か）の違いと居住者の年齢的な変化を中心に行なってきたが，これらの結果から，以下の点が明らかになった。

- a. 各対象地におおむね共通して認められる大都市のイメージは，「文化の程度が高い，よい働き口がある，忙しい，こわい，人が冷たい，親しみにくい，犯罪が多い，公害が多い，空気がきたない，自然が美しくない，交通が便利，買い物便利，立派な人が多い，孤独な人が多い」などである。全般的に，地方居住者は大都市に対して否定的なイメージをいっていると見える。
- b. 地方居住者の住んでいる土地についてのイメージは，大都市とは逆の傾向を示した。つまり，大都市への否定的なイメージとは反対に，自分の住んでいる土地へは肯定的なイメージを持っている。
- c. 地方居住者の大都市への意識を調べてみると，若年時（特に高校生）に大都市に強い憧れを感じ，住んでみたい，大都市へ進学したいなどの希望があるが，成人になり，生活基盤を地元で得るようになるとそのような気持ちはなくなる傾向が認められた。

これらの結果から，地方居住者は全般的には大都市に対して否定的なイメージを持ち，自分の住んでいる土地に肯定的なイメージを持っている傾向が認められるにもかかわらず，若年層では大都市への憧れも強く感じており，アンビバレント（両

面的）な感情を抱いていることがうかがえる。

近年は，かつてに比べるとその勢いは減少したと伝えられるが，それでもいままなお，毎年多くの若者が大都市に憧れ，大都市へやって来る。彼らは大都市に何を求めて，故郷を離れるのであろうか。このように大都会に憧れを感じている若者達は，大都市に否定的なイメージを持っている全体的な傾向とは異なる特殊なグループなのであろうか。それとも，地方の若者達は，大都市には否定的イメージを持ちながら，なおかつ憧れも感じているといった，両面性を持った感情を大都市に抱いているのであろうか。本稿の第1の目的は，そのような若者達の大都市への憧れ意識がどのようなもので規定されているかを，検討することである。

また，前述の通り，大都市に対して否定的なイメージが持たれている傾向が認められたが，それらの否定的イメージの一つ一つは，何か大都市に対する否定的な全体的態度を表わしているのであろうか，それとも，大都市のイメージは複数の潜在的な態度から構成されているのであろうか。本研究の第2の目的は，大都市イメージの構造を検討し，それらが居住都市の特性と居住者の年齢によってどのように変化するかを検討することである。

なお，前出の「都市イメージの分析」及び林原稿では，鳥取と壱岐を調査対象地としたデータを用いて分析を行なったが，鳥取のデータには一部の年齢層が落ちている点，及び，都市イメージの項目や測定方法がやや異なることなどを考慮して，本稿では，分析のためのデータには「都市イメージの分析Ⅰ」で用いられたものと同一の，第1次調査のデータを用いることとした。詳細は，以上の「方法」に示してある。また，本研究の一部は，「都市イメージの分析Ⅱ」（加藤・山本，1984）として日本教育心理学会第26回大会にて学会報告を行なった。

Ⅱ. 方 法

1. 調査項目について

「大都市」および「いま住んでいる所」について

表1 大都市イメージの構造—イメージ項目の一覧

1. 楽しい	12. 健康的でない
2. 生活しやすい	13. 犯罪が多い
3. 文化程度が高い	14. 公害が多い
4. 遊ぶところが多い	15. 夢がある
5. よい学校がある	16. のびのびとした
6. よい働き口がある	17. 好きだ
7. わずらわしくない	18. きれいだ
8. こわい	19. 交通が便利
9. ごみごみしている	20. 外国のようだ
10. 人が冷たい	21. 食物の種類が多い
11. 生活しにくい	22. 立派な人が多い

どんなイメージを持っているかを22項目にわたって質問した(表1)。回答方法は、「はい」、「いいえ」の2件法である。また、大都市の居住希望なども合わせて質問した。なお、調査票は「都市イメージの分析I」(加藤, 1984)の文末に示してあるので参考にされたい。

2. 調査対象者と調査地点について

調査対象者は、以下の4地域の小学生から壮年期の男性までの4つの年齢グループである。原則として各地区とも、小学生は5年生、中学生は2年生、高校生も2年生を調査対象者とした。そして、有効サンプル数が100を越えるように配慮して、調査票を配布した。壮年期男性のデータは、中学生の父親ないしは高校生の父親にあたる。

函館市：人口30万をかかえる北海道の中都市であるが、産業基盤が薄い。

水戸市：函館市と同じく人口30万の都市であるが都会型の茨城県の中都市。

名瀬市：人口5万の鹿児島県の小都市(島部)。

喜界町：確固とした産業のある人口1万の鹿児島県の小都市(島部)。

調査対象者の基本的属性や大都市と自分の住んでいる所についてのイメージの回答結果については、「都市イメージの分析I」に詳しく述べられているので、参照されたい。

3. 調査手続きについて

調査票の配布と回収は、各地の教育委員会の協力を得て、小、中、高校にまかせた。各校では、生徒に対しては授業中に回答させ、父親については持ち帰り方式とし、自宅で自記入させた。記入に要した時間は、およそ10~15分であった。

Ⅲ. 結果と考察

1. 大都市居住希望を決定する要因の検討

まず、本稿の第1の目的である大都市の居住希望の要因の検討を行なうこととする。

そこで、大都市に住んでみたいと思う者が各発達年齢別にどの位いるのであろうか調べてみた。大都市の居住希望を、小、中、高校生、および成人男子の各年齢別に、第1次調査では、以下の形式でたずねた。

長く住むかどうかは別として、一度は大都市に住んでみたいですか。

1. はい 2. いいえ 3. わからない

その結果は表2に示す通りである。大都市に居住を希望する者の割合は、高校生までは年齢が上がるに従って上昇するが、成人になるとそう思う者の率は大巾に減少する。成人男子では26%の者しか大都市への居住を希望していないが、高校生では9割近くの者が、一度は大都市に住んでみたいと考えており、若年層の大都市への憧れは非常に高い。

そこで、このような大都市への憧れがどのような要因によって決定されているかを検討するために、大都市居住希望を従属変数に大都市および自

表2 大都市居住希望者の割合

	N	はい	いいえ	わからない
全体	1838	64.5	27.2	8.1
小学	447	69.6	21.3	8.9
中学	491	71.9	16.5	11.5
高校	489	85.1	10.2	4.5
成人	411	25.5	66.7	7.3

表3 地方居住者の大都市居住希望の要因分析 — 大都市居住希望を外的要因とした数量比Ⅱ類の結果

相 関 比		全 体	小学生	中学生	高校生	成 人
大 都 市 の イ メ ー ジ	楽 し い	0.925	0.455	0.873	0.362	0.622
	生活しやすい	0.245	0.020	0.193	0.029	0.709
	文化程度が高い	0.244	0.729	0.313	0.354	*0.089
	遊ぶところが多い	*0.372	*0.331	0.017	0.228	*0.248
	よい学校がある	0.339	0.683	*0.251	*0.133	0.005
	よい働き口がある	0.026	0.433	0.052	*0.014	0.195
	わずらわしくない	*0.173	*0.040	0.188	*0.193	*0.607
	こ わ い	0.231	0.006	0.528	0.101	0.300
	ごみごみしている	*0.285	*0.016	*0.045	0.368	*0.653
	人が冷たい	*0.047	*0.141	*0.081	0.153	*0.364
	生活しにくい	*0.128	*0.121	*0.326	*0.214	0.589
	健康的でない	0.053	0.090	0.139	*0.097	0.641
	犯罪が多い	*0.006	0.226	0.418	*0.504	*1.967
	公害が多い	0.180	*0.521	0.292	*0.000	1.759
	夢がある	0.077	0.551	0.327	0.343	0.294
	のびのびとした	0.320	0.212	*0.114	0.219	0.870
	好 き だ	0.997	0.493	0.613	1.262	0.763
きれいだ	*0.309	*0.052	*0.022	*0.392	*0.130	
交通が便利	*0.169	0.080	0.080	*0.256	*0.887	
外国のようだ	0.106	0.230	0.164	0.341	*0.011	
食物の種類が多い	*0.076	0.089	0.200	*0.100	0.032	
立派な人が多い	0.051	0.130	0.168	0.234	0.091	
居 住 都 市 の イ メ ー ジ	楽 し い	*0.034	*0.414	*0.024	0.380	*0.203
	生活しやすい	*0.043	0.016	0.124	0.432	*0.282
	文化程度が高い	*0.119	0.026	*0.213	*0.374	*0.108
	遊ぶところが多い	0.002	*0.249	0.087	*0.082	*0.075
	よい学校がある	*0.021	0.024	*0.140	*0.396	*0.202
	よい働き口がある	*0.113	*0.363	*0.174	0.030	*0.011
	わずらわしくない	*0.146	0.041	0.221	*0.486	*0.423
	こ わ い	*0.280	*0.338	*0.509	*0.098	0.067
	ごみごみしている	*0.105	*0.333	*0.380	0.349	0.427
	人が冷たい	*0.080	*0.074	*0.583	0.042	0.091
	生活しにくい	*0.197	*0.290	0.153	*0.272	*0.173
	健康的でない	0.146	0.079	0.400	0.316	0.023
	犯罪が多い	0.029	0.115	*0.014	*0.429	0.037
	公害が多い	*0.032	*0.358	*0.181	*0.370	0.182
	夢がある	*0.017	*0.033	0.272	0.263	*0.220
	のびのびとした	*0.003	*0.409	*0.400	*0.174	0.363
	好 き だ	0.216	0.686	0.075	*0.261	0.325
きれいだ	*0.184	*0.401	*0.180	*0.191	0.329	
交通が便利	*0.161	*0.009	*0.108	*0.484	0.013	
外国のようだ	*0.314	*0.507	*0.442	*0.489	0.343	
食物の種類が多い	*0.313	*0.568	*0.122	*0.324	*0.249	
立派な人が多い	0.073	0.236	*0.237	0.260	0.020	

分が住んでいる都市へのイメージを独立変数として、数量化Ⅱ類を用いて検討を行なった。従属変数は、上記の質問への回答カテゴリーの「はい」の回答者を「住みたい」とし、「いいえ」及び「わからない」の回答者を「住みたくない」とし、2群に分けた。独立変数として用いられたのは、大都市及び自分の住んでいる所に関する、表1に示したイメージの各22項目である。

まず、小学生から成人までを一緒にして大都市居住希望と大都市及び自分の住んでいる所のイメージとの関係を検討した。その結果が、表3の左端の行に示されている。

表3の数値は、各イメージ項目のカテゴリー・ウェイトのレンジを表わす。特に、大きな値には■を付けた。また、表内の*印は、大都市居住希望に、当該項目の「いいえ」が結びついていることを示す（大都市居住希望の予測値の正負の符号と当該項目の「いいえ」のカテゴリー・ウェイトが同符号になっている）。無印の場合には、「はい」の回答が結びついている。例えば、大都市のイメージの「楽しい」の「はい」が、また同じ「ごみごみしている」の「いいえ」が、大都市居住希望と結びついているといえる。

全体で見ると、大都市居住希望にプラスに関係しているのは、大都市が「好きだ」、「楽しい」、「遊ぶところが多い（いいえ）」、「よい学校がある」、「のびのびした」などであり、一つを除くと、そう思うことが大都市居住希望と結びついている。また、現在の居住都市を「外国のようだ」、「食物の種類が多い」と思わないことが大都市への居住希望と結びついている。

大都市のイメージとして共通して認められた、「忙しい」、「こわい」、「人が冷たい」、「公害が多い」、「空気がきたない」などの、否定的な項目は、大都市への居住希望には余り強く結びついていないことが分かる。ただし、それでは肯定的な項目が結びついているかと言うと、それもあまり認められず、「好きだ」、「楽しい」、といった漠然とした全体的な好意的感情だけが、大都市への居住希望と結びついていると言える。つまり、「これこれこうだから大都市に住んでみたい」といった具体的な理

由や、「大都市のこういう点に引かれて大都市に住んでみたいと思う」といった具体的なイメージもあまり認められない。

このように、全体を一括して分析してみた結果を見ると、大都市への居住希望には、具体的なイメージ項目はあまり結びついていないことがわかった。しかし、大都市への居住希望に結びついている要因は各年齢段階によって異なっているとも考えられる。そこで、大都市居住希望と都市のイメージとの関係を年齢別に検討してみた結果、各年齢段階によって大都市居住希望と関係するものがさまざまに異なっていることが分かった。表3の左から2行目から右端までに、各年齢段階別の数量化Ⅱ類の分析結果を示してある。

各年齢で共通しているのは、大都市が「好きだ」、「楽しい」、「夢がある」と思うこと、および住んでいる土地の「食物の種類が多い」と思わないことなどだけである。

例えば、小学生では、他に「文化の程度が高い」、「良い学校がある」、「良い働き口がある」、「公害が多い（いいえ）」などの大都市のイメージが結びつき、自分の住んでいるところのイメージの「楽しい（いいえ）」、「のびのびとした（いいえ）」、「きれいだ（いいえ）」、「外国のようだ（いいえ）」などが、大都市居住希望と結びついている。

中学生では、大都市が「こわい」、「犯罪が多い」などの否定的なイメージが、大都市居住希望と結びついている。また、自分の住んでいる所については「こわい（いいえ）」、「人が冷たい（いいえ）」の肯定的なイメージと結びついているが、それと同時に、「のびのびとした（いいえ）」、「外国のようだ（いいえ）」など否定的なイメージもある。

このように、大都市居住希望に結びついているイメージ項目は、年齢段階によって違いが認められるが、特に、大都市への居住希望の強い高校生と成人では、関連のある項目が大きく異なる。

成人の場合は、大都市への居住希望は大都市そのもののイメージと結びついていて（例えば、「のびのび」、「生活しやすい」、「ごみごみ（いいえ）」など）、居住都市へのイメージにはあまり強くは結びついていない。それに対して、高校生では逆に、

大都市への居住希望が現在住んでいる土地へのマイナスのイメージと結びついていて(例えば、「外国のようだ(いいえ)」「わずらわしくない(いいえ)」「交通便利(いいえ)」「よい学校(いいえ)」「文化程度高い(いいえ)」「ごみごみしている」など)、大都市のイメージで特に強い結びつきの見られるものは多くない。成人男子が大都市の特性にひかれて居住を希望しているのに対して、高校生は自分の住んでいる土地への反感から大都市への居住を希望しているように見える。

しかし、両者の場合でも、必ずしも大都市へのプラスのイメージだけ、住んでいる土地へのマイナスのイメージだけが、大都市への居住希望と結びついているわけではない。大都市へ居住することを希望する成人でも、大都市を「公害が多い」、「交通が便利(いいえ)」、「わずらわしい」とも考えている。また、高校生の場合でも、大都市への居住を希望していながら、自分の住んでいる土地を「生活しやすい」、「楽しい」と感じており、大都市に住んでみたいとする気持ちの中にも、大都市や居住都市へのアンビバレントな感情が存在することがうかがえる。

2. 大都市イメージの構造

以上のように、大都市に対するイメージの中には、「楽しい」、「夢がある」など居住希望に結びつく肯定的なイメージと「こわい」、「ごみごみしている」、「人が冷たい」など居住希望にあまり結びつかない否定的なイメージなどがあり、一様でないことがうかがえる。そこで、地方居住者が大都市に対して持つイメージの構造を検討してみることにした。

まず、大都市のイメージを測定するのに用いられた22項目のうち、回答率に極端な偏りのある4項目を削除して、数量化Ⅲ類による構造分析を行ない、大都市イメージの基本的な構造を探った。表4に、第5軸までのアイテム・カテゴリ・ウェイト値を示した。

数量化Ⅲ類の結果、第1軸には、プラスの方向にカテゴリ・ウェイトの高いものとして、「楽しい(いいえ)」、「好きだ(いいえ)」、マイナスの方向に

は、「生活しやすい(はい)」、「のびのびとした(はい)」、「健康的でない(いいえ)」、「生活しにくい(いいえ)」などの項目が並んでいる。第1軸は、「生活しやすさ」の軸と考えられる。

第2軸は、「食物の種類が多い(いいえ)」、「よい学校がある(いいえ)」、「人が冷たい(いいえ)」、「こわい(いいえ)」、「よい働き口がある(いいえ)」、「立派な人が多い(いいえ)」、「健康的でない(いいえ)」などの項目のカテゴリ・ウェイトが高い。第2軸は、都市へのマイナスのイメージ全体を表わしていると考えられる。

第3軸は、「交通が便利(いいえ)」、「よい学校がある(いいえ)」、「遊ぶところが多い(いいえ)」、「のびのびとした(はい)」、「外国のようだ(はい)」などのカテゴリ・ウェイトが高い。第3軸は、不便さに関する軸と考えられる。

第4軸は、「楽しい(いいえ)」、「きれいだ(はい)」、「好きだ(いいえ)」、「わずらわしくない(はい)」、「のびのびとした(はい)」など、解放感を表わす軸であると考えられる。

第5軸は、マイナスに「のびのびとした(はい)」、「食物の種類が多い(いいえ)」、「きれいだ(いいえ)」が高く、プラスには「遊ぶところが多い(いいえ)」、「生活しにくい(いいえ)」、「きれいだ(はい)」が高い。

このように見てくると、「好きだ」、「楽しい」など、大都市の居住希望と関係の深かった全体的な好意的態度を表わす項目と、大都市のイメージとして回答頻度の高かった「こわい」、「人が冷たい」、「犯罪が多い」などの否定的なイメージ項目が、それぞれ別の軸にカテゴリ・ウェイトの高い項目として現われており、大都市への好意と否定的なイメージとは、それぞれ独立なものであることが想定される。

さて、これらの構造を持つ大都市のイメージが、発達年齢の変化によって、また、居住地域によってどのように異なるかを検討してみることにした。そこで、地域別×年齢別にY値の平均値を求めて、第1軸と第2軸、および、第3軸と第4軸の平面上にそれぞれプロットしてみた(図1、図2)。

表4 都市のイメージの構造 — 数量化Ⅲ類の結果・その1

	第一軸	第二軸	第三軸	第四軸	第五軸
楽しい (Y)	-1.01	0.29	-0.00	-1.56	-0.05
楽しい (N)	2.02	-0.61	0.03	3.19	0.11
生活しやすい (Y)	-2.35	-0.68	-1.61	0.95	1.88
生活しやすい (N)	1.03	0.31	0.71	-0.40	-0.83
遊ぶところが多い (Y)	-0.49	0.39	-1.06	0.44	-1.48
遊ぶところが多い (N)	0.99	-0.80	2.14	-0.88	2.99
よい学校がある (Y)	-0.26	0.49	0.30	0.05	0.24
よい学校がある (N)	1.41	-2.74	2.67	-1.35	0.06
よい働き口がある (Y)	-0.31	0.49	-0.30	0.05	0.24
よい働き口がある (N)	1.48	-2.40	1.55	-0.25	-1.13
わずらわしくない (Y)	-0.86	0.15	0.12	1.92	-0.77
わずらわしくない (N)	0.64	-0.15	-0.08	-1.42	0.56
こわい (Y)	0.47	1.02	-0.14	-0.04	-0.29
こわい (N)	-1.12	-2.41	0.34	0.11	0.68
人が冷たい (Y)	0.54	0.71	-0.42	-0.05	-0.33
人が冷たい (N)	-1.83	-2.41	1.44	0.19	1.11
生活しにくい (Y)	1.12	0.62	0.62	-0.49	-1.07
生活しにくい (N)	-2.07	-1.13	-1.12	0.88	1.94

表5 都市のイメージの構造 — 数量化Ⅲ類の結果・その1

	第一軸	第二軸	第三軸	第四軸	第五軸
健康的でない (Y)	0.52	0.54	-0.37	-0.29	0.10
健康的でない (N)	-2.18	-2.28	1.55	1.19	-0.46
夢がある (Y)	-0.94	0.82	0.57	-1.02	-0.69
夢がある (N)	1.42	-1.25	-0.87	1.53	1.07
のびのびとした (Y)	-2.30	-0.26	2.09	1.89	-4.09
のびのびとした (N)	0.47	0.06	-0.44	-0.38	0.85
好きだ (Y)	-1.52	0.13	0.29	-1.79	-0.09
好きだ (N)	1.62	-0.14	-0.30	1.93	0.09
きれいだ (Y)	-1.96	0.14	1.89	2.09	-1.75
きれいだ (N)	0.61	-0.05	-0.59	-0.66	0.55
交通が便利 (Y)	-0.17	0.26	-1.04	-0.02	-0.12
交通が便利 (N)	0.74	-1.12	4.41	0.07	0.50
外国のようだ (Y)	-0.01	1.88	2.02	0.55	0.59
外国のようだ (N)	0.00	-1.13	-1.21	-0.33	-0.35
食物の種類が多い (Y)	-0.19	0.75	0.11	0.40	0.69
食物の種類が多い (N)	0.76	-3.03	-0.52	-1.71	-2.77
立派な人が多い (Y)	-0.41	1.21	0.75	0.38	0.84
立派な人が多い (N)	0.76	-2.33	-1.49	-0.79	-1.58

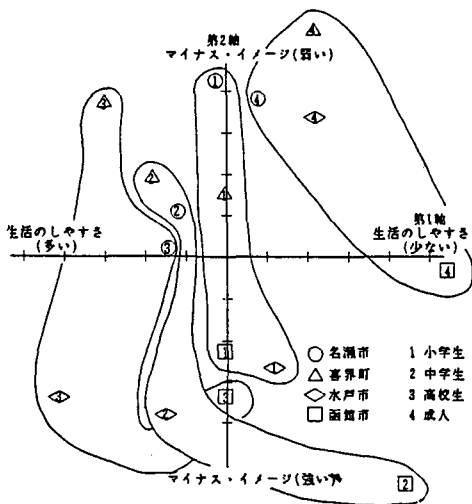


図1 地域×年令別にみた大都市のイメージ
(第1軸×第2軸)

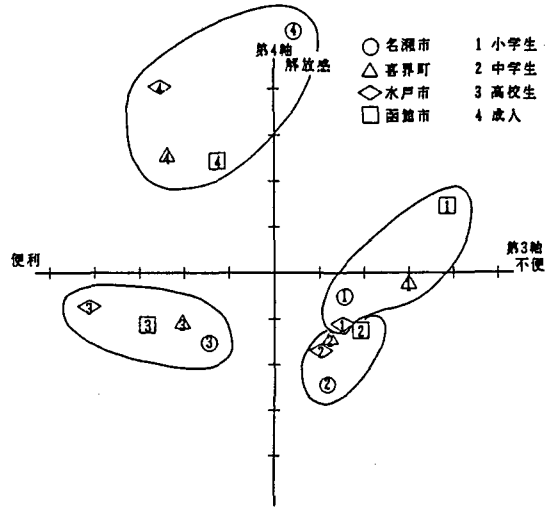


図2 地域×年令別にみた大都市のイメージ
(第3軸×第4軸)

図1は、「生活のしやすさ」(第1軸)をX軸に「大都市のマイナス・イメージ」(第2軸)をY軸にとり、地域および年齢的な変化を見てみたものである。それによると、第1軸については、高校生と成人男子が全く対称的な位置にいるのが分かる。高校生は大都市に対して「生活しやすい」というイメージをいだいているのに対して、壮年期男性は反対に「生活しにくい」というイメージを抱いている。小学生や中学生は両者の中間に位置し、その側面についてのイメージは、前二者に比べると不明瞭である。また、大都市のマイナス・イメージは、年齢的な変化より居住地域の特性の方が関係が強い。名瀬市、喜界町の対象者は、いずれの年齢段階でもマイナス・イメージが弱いに対して、水戸市、函館市では壮年男性を除いたほとんどがマイナス・イメージが強い。都市規模が大きくなり、大都市の近くに居住する者ほどマイナス・イメージを持っていると言える。

図2は、同様に、「不便さ」(第3軸)をX軸に「解放感」(第4軸)をY軸にしたものである。これらの軸では、地域特性の違いは認められず、不便さの認識においては、小、中学生対高校生、成人男子という対比が、また、解放感の認識においては、成人男子対中、高校生 という対比が見られる。

このように見てくると、居住地域の違いは、大都市へのマイナス・イメージに大きな差を生んでいるといえる。大都市に近い地域ほど大都市へのマイナス・イメージが強く、大都市から離れるほどマイナス・イメージが弱くなる。

しかし、それ以外の大都市へのイメージには、地域による差よりも発達年齢による違いの方が大きい。成人は、大都市へは生活のしにくさと、そしてそれとは反対の解放感を強く感じている。それに対して、高校生は「楽しい」、「好きだ」という項目に結びついた生活のしやすさを強く感じている。そして、中学生や小学生は、これらの年長者に比べると、いずれも中立的な所に位置しており、成人や高校生に比べると、大都市のイメージはあまり明確でないとと言える。

引用文献

- 加藤義明 1984 都市イメージの分析(1) 人文学報
No.168. 75~120
- 加藤義明・山本真理子 1984 都市イメージの分析 II
日本教育心理学会第26回総会発表論文集 506~
509
- 加藤義明・林洋一・詫摩武俊・山本真理子 1985 都

- 市イメージの分析Ⅲ 日本教育心理学会第27回総会発表論文集 556～559.
- 菅野幸宏・加藤孝義・田中潜次郎 1981 a, 東北の都市のイメージ — その1 評定法と連想法による分析 — 日本心理学会第45回大会発表論文集 p. 725.
- 菅野幸宏・加藤孝義・田中潜次郎 1981 b, 東北の都市のイメージ — その2 セマンティック・ディファレンシャル法による分析 — 日本心理学会第45回大会発表論文集 p. 726.
- Lynch, K. 1960, *The Image of the City*. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Milgram, S. 1970, *The Experience of Living in Cities*. *Science*, 167,1461～1468.
- 岡村一成・駒崎 勉 1978, ベットタウンの居住条件と住民の生活意識に関する調査研究 (その2) 日本心理学会第42回大会発表論文集, p. 1278.
- 岡村一成・駒崎 勉 1979, 生活環境のイメージに関する調査研究, 日本教育心理学会第21回総会, 590～591.

Key Words (キー・ワード)

Image (イメージ), Large City (大都市), Structural Analysis (構造分析), Comparison among Developmental Stages (発達段階の比較)